〔研究論文〕

曹丕『典論』研究

― 武人としての矜持 ―

永 田 諒 乃・松 野 敏 之

曹丕および『典論』については、文学や政治の観点から研究が蓄積されてきた。本稿では曹丕自身が『典論』自叙で馬・弓・剣に多くの言を費やしていることと、『典論』に「剣銘」が収めれていることに注目し、現存する曹丕の書簡や賦などから曹丕が自覚的に武事について論じていることを考察した。曹丕は自身が馬・弓・剣について鍛錬を積み重ねてきたことを述べており、特に馬と弓が結びつく猟を好んでいたことがうかがえる。『三国志』では皇帝である曹丕が猟に出かけることについて否定的な見解が収められているが、曹丕自身は武人たちと共に猟をすることを楽しんでいた。曹丕は武人としての矜持を抱くが故に、馬・弓・剣について自覚的に論じていたと言えるのである。『典論』の一篇「剣銘」に見える「君子は文事有りと雖も、必ず武備有らん」という一句は、朝廷と戦場に身を置いた曹丕の見解を端的に表しているかのようであり、曹丕の著述からは武人としての矜持がうかがえるということを指摘した。

キーワード：曹丕、『典論』、南皮の游、曹休、猟、校猟賦、剣銘

序

三国時代、魏の初代皇帝（魏文帝）である曹丕（187 ～ 226）は、父曹操や弟曹植と共に文学者としても知られている。特に曹丕の著書である『典論』論文篇は『文選』に採録されて以来、「蓋し文章は経国の大業、不朽の盛事なり」から始まる文章が注目され、盛んに議論されてきた。

曹丕に関して、魏の初代皇帝としては政治・制度の側面から、また文人として

は『典論』や詩歌の側面から研究が重ねられてきた。文人としての曹丕は、まず魯迅によって評価された。魯迅が「曹丕の時代は“文学の自覚時代”であった」[(1)]と指摘したことは、その後の評価を方向付けるものであり、曹丕は文学・芸術面より研究されていった。たとえば、1980 年代から 21 世紀初めまでの中国における曹丕研究を整理した童瑜氏は、曹丕研究を次のように整理する[(2)]。

一、曹丕詩歌思想内容研究
二、曹丕詩歌芸術風格研究
三、曹丕文学理論研究
四、曹丕詩歌成就与文壇地位影響研究

このことは、詩歌・文学・文壇などの観点から曹丕が研究されてきたことを示しており、曹丕の周囲にいる人物についても必然的に建安七子などの文人が注目されることとなる。日本でも、鈴木虎雄・青木正児を始めとして文学的な価値を求める研究が多くあらわれた[(3)]。曹丕は文学の先駆的存在として扱われ、文学理論の観点から注目されてきたと言える。

21 世紀になると『典論』論文篇は文学的価値だけではなく、政治的価値を持ち、文人集団の中で自らの後継者としての価値を示したものとの見解が提示されるようになる。20 世紀にも『典論』は文学の自覚を述べたものではないという指摘は見られたが[(4)]、2000 年頃より多くの研究が出てきた。中国の宋戦利氏は「魏文帝曹丕対儒家文化的復興」で「魯迅のいうような、“近代でいう芸術のための芸術”の立場にたって、文学の価値や不朽さを宣揚しようとした気らくなものではなく、太子の地位獲得（あるいは保持）のための、懸命な自己宣伝の作だったことになろう」という政治性重視の見方を提示[(5)]。日本の福井佳夫氏も『六朝文評価の研究』でその見解を支持している[(6)]。そして近年、陸続と『三国志』研究を提示している渡邉義浩氏は、曹丕の『典論』について次のようにまとめている。

> 『典論』は、第一に嫡長子である自らの即位を正統化し、第二に政策の典範・淵源をまとめ、第三に諸文化を収斂し、第四に人物評価を一元化することを目的に著された。『典論』は、文化を存立基盤とする「名士」に対抗して君主権力を確立するため、文化的諸価値を一元化しようとする曹丕の見識を示す典範の論である[(7)]。

曹丕の『典論』は、正統な後継者であることを主張するという政治目的をもち、名士層に対する君主権力を確立するために文化を一元化することを目的として、曹丕の見識を示す典範が著されているとしている。

この“典範が著わされている”という点については、和久希氏がさらに敷衍し、

曹丕が『典論』および『皇覧』を制作したことは、「経典を根底にあらゆるすぐれた文章をその内にこめて、世界像の全体を提示しようとするもの」と指摘している[8]。曹丕は『典論』を執筆することで、世界全体を整理して把握・提示しようとしており、そしてそれが国家支配にも寄与するとみていたという見解である。この他、牧角悦子氏も渡邉氏の見解を踏まえ、曹操・曹丕・曹植の文学を相対的にとらえなおした[9]。

しかし、現存する『典論』を読むと、「剣銘」などいわゆる文学・政治の観点からは評価しがたい篇もある。そもそも『典論』自叙も末尾で曹丕が学問について述べたところが注目されるが、全体的に多くの言を費やすのは剣・馬・弓などの話である。曹丕の『典論』については、武に関する記述にも注目する必要があろう。そのため、本稿では先行研究をふまえながら、曹丕の『典論』に見える弓・猟・剣などの記述や武人との関わりを検討したい。

なお、曹丕研究において留意する必要があるのはやはり『三国志』の記述の仕方である。陳寿の著した正史『三国志』は当時の状況を知る上で欠かせない書物であるが、従来から指摘されている通り、陳寿には陳寿の観点や立場がある。蜀出身の陳寿は、魏を滅亡させた西晋を正統とすることを前提に編纂しているため、魏の曹家に対して随所に批判が見られる。たとえば第二代皇帝曹叡に対する陳寿の評（『三国志』巻三・明帝紀）は、「君人の至概有り」としながらも、天下が疲弊していた時期に宮殿を造営したことは、秦の始皇帝や漢の武帝の轍をふむものであり、将来計画という観点からすれば失敗であったとまとめる。曹丕に対する陳寿の評は肯定的なものではあるが、曹丕と劉備の皇帝即位に関する記述を比較した場合、魏の皇帝である曹丕よりも、劉備の即位の方が詳しい記述となっている。繰り返し指摘されていることではあるが、やはり『三国志』には、西晋当時の思想や政治意識などが少なからず盛り込まれている[10]。

本稿で注目する曹丕の武や猟についても、『三国志』には否定的な記録が収められることとなる。曹丕自身は肯定的に語り、おそらく同時代でもおもねりを含むとはいえ実際に好意的に見ていた人はいたであろうが、『三国志』が編纂される時期には否定的な記述が採用されたという問題である。ただ、魏の初代皇帝曹丕の文章・詩賦は、蜀の劉備や晋の宣帝（司馬懿）とは異なり、現在まで伝えられているものは多い。本稿では、まず曹丕自身が著した文章を重視していきたい。

一　『典論』執筆時期

『典論』は、100 篇以上の曹丕の文章や詩賦が収められた書とされる。『三国志』巻 2・文帝紀で裴松之が引用する『魏書』に、「故に論撰して著はす所の典

論、詩賦、蓋し百余篇」とある。曹丕の『典論』は簡冊としてまとめられただけではなく、魏の時代には全文が石碑にも刻されていたという[11]。唐代まではまとまって伝わっていたようであるが[12]、その後、徐々に散逸し、現在は『文選』や類書などに部分的に収録された状態でしか残っていない[13]。

『典論』の執筆時期については、様々な考察がされている。裴松之が文帝紀の注に引く『魏書』には、建安 22 年（217）の疫病が流行した太子の時期に、曹丕は『典論』や詩賦を著わし、儒者たちを集めて議論したことが記されており[14]、どの程度の分量であったかは分からないが太子の時期に『典論』という書が編纂されていたことは確実である。また、『典論』の中で殊に有名な「論文篇」については、執筆時期についても多くの論考がある。張振龍「曹丕《典論・論文》創作年代与創作目的」は、先行研究に見える執筆時期を三説にまとめる[15]。すなわち、①黄初元年（220）、②太子時期（216 ～ 220）、③建安 16 年（211）頃の三つの時期が想定されているという。特に②太子時期とするものが多く、張氏自身は『典論』論文篇の執筆時期を建安 24 年（219）「与呉質書」の後と推論する。また『典論』の文章として最も遅い執筆が確認できるのは、黄初 3 年（222）の「終制」となる[16]。

『典論』の文章・詩賦は、ある一時期に完成したものではない。ただ、その多くは太子の時期（216 ～ 220）に執筆されたことが想定されるものであり、本稿で注目する「自叙」や「剣銘」もこの時期に執筆されたものであろう。確たる証拠とはならないが、『典論』自叙では、父曹操のことを「上」と表現し、亡き兄曹昂（字は子修）のことは「亡兄孝廉子修」と記している。曹丕は、皇帝即位後には亡き父のことを「先帝」と表現しており、「自叙」は曹操在世時＝太子時期の執筆であることが推定される。また、「剣銘」は建安 24 年（219）に製造を依頼したことが記してあり、太子時期の執筆であることは確実である。

『典論』に収められたほとんどの篇は曹丕・曹植の後継者争いが激しい時期に執筆された。後継者争いに関わってくるのが文人であったことから、まず曹丕と文人との関わりに目が向けられる。しかし、曹丕自身の著作からはいわゆる武人との親しい交友もうかがえるのであり、まず曹丕と武人との関わりについて確認していきたい。

二　南皮の游

曹丕は文章や詩賦について優れた作品が多く、曹丕の周囲には当然ながら文人集団が多くいた。たとえば曹丕が五官中郎将となった頃のことを、『三国志』王粲伝では次のように記す。

始め文帝 五官将［五官中郎将］[17]と為り、平原侯植［曹植］と及(とも)に皆文学を好む。粲［王粲］と北海の徐幹、字は偉長、広陵の陳琳、字は孔璋、陳留の阮瑀、字は元瑜、汝南の応瑒(おうとう)、字は徳璉、東平の劉楨、字は公幹と、並びに友善せらる。

〈始文帝爲五官將、及平原侯植皆好文學。粲與北海徐幹字偉長、廣陵陳琳字孔璋、陳留阮瑀字元瑜、汝南應瑒字德璉、東平劉楨字公幹、並見友善。〉

『三国志』巻 21・王粲伝

曹丕の五官中郎将時代の交友としては、いわゆる建安七子である王粲・徐幹・陳琳・阮瑀・応瑒・劉楨らとの交流が記される。『典論』論文篇でも建安七子の作品について曹丕が論じているが故に、後世の関心が文人に向けられるのは当然と言えよう。曹丕の交流相手としては王粲・徐幹等文人たちがまず検討されてきた[18]。

しかし、交流相手として曹丕自身は文人だけを重視していたわけではない。建安 20 年（215）、五官中郎将だった頃のことを、曹丕は当時から一緒だった呉質（？～ 230）に次のように述べた。

毎(つね)に念ふ、昔日南皮(なんぴ)の游、誠に忘るべからず。既に六経［易・書・詩・礼・春秋・楽］を妙思し、百氏［諸子百家］に逍遥し、弾棊 間設し、終に以て博奕し、高談 心を娯(たの)しましめ、哀箏(あいさう) 耳に順(したが)ふ。北場に馳騖(ちぶ)［遊猟］[19]し、南館に旅食し、甘瓜を清泉に浮かべ、朱李を寒水に沈ましむ。

〈毎念昔日南皮之游、誠不可忘。既妙思六經、逍遥百氏、彈棊間設、終以博奕、高談娯心、哀箏順耳。馳騖北場、旅食南館、浮甘瓜於清泉、沈朱李於寒水。〉

「与呉質書」（建安 20 年）

曹丕は、建安七子等と南皮（現河北省滄州市）にて交流した頃のことを「南皮の游」と呼び、儒学の経書や諸子百家のことを考え、遊びや博打をしたことを懐かしがっている。また、屋内での談笑だけではなく、外に出て馬を走らせたことや泉で遊んだことも記している。

この後の延康元年（220）[20]にも、呉質に送った手紙の中に「南皮の游」という表現が見られる。

太子［曹丕］王位に即き、又質に与ふるの書に曰く、「南皮の游、存する者三人。烈祖龍飛し、或いは将たり或いは侯たり。今惟(た)だ吾子(ごし)［呉質］のみ、下仕に棲遅す、我に従ひて游ぶ処、独り門に及ばず。瓶(へい)の罄(つ)くるは罍(らい)の恥［酒

宴において、準備した酒がすっかり無くなることは宴主の恥］、能く愧を懐ふこと無からんや。路は遠しと云はず、今復た相聞す。」と。初め、曹真、曹休も亦た質等と俱に渤海の游ぶ処に在り。時に休、真も亦た宗親を以て並びに爵封を受く、出でて列将と為るも質は故より長史為り。王［曹丕］ 質を顧みるに望み有り、故に二人を称して以て之を慰む。

〈太子即王位、又與質書曰、「南皮之游、存者三人。烈祖龍飛、或將或侯。今惟吾子、棲遲下仕、從我游處、獨不及門。瓶罄罍恥、能無懷愧。路不云遠、今復相聞。」初、曹真、曹休亦與質等俱在渤海游處。時休、真亦以宗親並受爵封、出為列將而質故為長史。王顧質有望、故稱二人以慰之。〉

『三国志』巻 21・呉質伝

延康元年（220）の書簡では「南皮の游、存する者三人［曹休・曹真・呉質］」と述べており、曹丕が回顧する「南皮の游」には、王粲・徐幹・陳琳・阮瑀・応瑒・劉楨などの建安七子ら文人だけでなく、呉質や曹休・曹真等も一緒にいたことがうかがえる。特に曹休と曹真は共に武人として功績があり、曹休は鎮南将軍・征東大将軍を歴任して呉方面の軍事を担い、曹真は征蜀護軍・上軍大将軍・中軍大将軍・大将軍を歴任して蜀方面の軍事を担った。後世の研究では、曹丕の交流相手としては文人がまず注目されるが、曹丕の書簡からは曹休・曹真等武人たちとの交流も重んじていたことがうかがえる。

三　曹丕の交友――曹休

「南皮の游」で名前を挙げられた曹真については、後節にて採りあげるため、本節ではいま一人の曹休に注目したい。

『三国志』曹休伝には、曹丕と曹休の出会いを次のように記す。

曹休、字は文烈、太祖［曹操］の族子なり。……太祖 義兵を挙ぐるを以て、姓名を易へ転じて荊州に至り、間行して北帰し、太祖に見ゆ。太祖 左右に謂ひて曰く、「此れ吾が家の千里の駒なり。」と。文帝［曹丕］と同に止まらしめ、見ひ待すること子のごとし。

〈曹休字文烈、太祖族子也。……以太祖舉義兵、易姓名轉至荊州、閒行北歸、見太祖。太祖謂左右曰、「此吾家千里駒也。」使與文帝同止、見待如子。〉

『三国志』巻 9・曹休伝

曹操の挙兵にかけつけた曹休のことを、曹操は「千里の駒」と評した。これ以

来、曹操は曹休を我が子のように扱い、曹丕とともに幼い頃から戦場に連れて行った。曹休は曹操の時には中央軍を率いており、曹操と夏侯惇が立て続けに亡くなった後には曹丕のもとで鎮南将軍・征東大将軍となって魏の軍事を統括した。呉に対する要として曹丕が頼りにした人物である。延康元年（220）、曹休が鎮南将軍として遠征する際、魏王であった曹丕は曹休を自ら見送っている。曹休伝には次のようにある。

> 文帝 王位に即き、［曹休を］領軍将軍と為し、前後の功を録して、東陽亭侯に封ず。夏侯惇薨ず、休を以て鎮南将軍・仮節と為し、諸軍事を都督せしむ。車駕もて臨送し、上（しやう）［曹丕］乃ち輿を下り手を執りて別る。
> 〈文帝即王位、為領軍將軍、錄前後功、封東陽亭侯。夏侯惇薨、以休爲鎮南將軍假節、都督諸軍事。車駕臨送、上乃下輿執手而別。〉
>
> 『三国志』巻 9・曹休伝

魏王である曹丕が曹休をわざわざ自分の車で見送り、最後には手をとって別れを惜しんだ。曹丕の「車駕もて臨送」という対応は、『三国志』中には曹休にしか見られない格別なものである[21]。

四　弓・馬

曹丕が武人たちとも親しく交流していたことの背景には、何よりも曹丕自身が武の人であったという事実があると思われる。特に『典論』自叙では、曹丕が自身の半生を顧みながら、弓馬や猟、剣について述べていく。『典論』自叙（947字）のうち、およそ 7 割が武事の話題に費やされており、「自叙」の主眼が自身の武芸を語ることにあったのではないかと思われるほどである。曹丕にとって馬・弓・剣や猟とはどのようなものであったのか。まず弓・馬から確認したい。

建安2年（197）、まだ袁紹を破る前の曹操は、張繡によって手痛い敗戦を喫したことがある。この敗戦において、曹操は信頼する典韋だけでなく、息子の曹昂をも失った。その戦場に十歳の曹丕も居合わせていた。曹丕は次のように述べる。

> 建安の初め、上［曹操］荊州に南征す。宛に至り、張繡降る。旬日にして反し、亡兄孝廉子修［曹昂］、従兄安民 害に遇ふ。時に余 年十歳、馬に乗りて脱するを得たり。夫れ文武の道は、各（おの）おの時に随ひて用ふ。中平の季［中平年間（184～189）の末年］に生まれ、戎旅［軍旅］の間に長じ、是（ここ）を以て少（わか）くして弓馬を好み、今に衰へず。禽を逐ふこと輒ち十里、馳射すること常に

百歩、日び体健多く、心毎に厭はず。

〈建安初、上南征荊州。至宛、張繡降。旬日而反、亡兄孝廉子修、從兄安民遇害。時余年十歳、乗馬得脱。夫文武之道、各隨時而用。生于中平之季、長于戎旅之間、是以少好弓馬、于今不衰。逐禽輒十里、馳射常百歩、日多體健、心毎不厭。〉　『典論』自叙

兄曹昂も命を失った戦場で、曹丕は幼い頃から学んできた乗馬の技術によって危地を脱することができたと記す。幼い頃から軍中で育ったと言うあたり、曹丕には武人としての矜持がうかがえるのである。

曹丕はさらに自らの武事について猟の話や射御の術をあげ次のように述べる。

建安十年［205 年］、始めて冀州を定む。穢・貊［東北地方の蛮族］は良弓を献り、燕・岱は名馬を献る。時に歳の暮春に、勾芒［春の神］節を司り、和風 物を扇ぐ、弓燥き手柔ぎ、草浅く獣肥ゆ。族兄の子丹［曹真］と鄴［魏の都］の西に猟し、終日手づから麞・鹿九、雉・兎三十を獲たり。後に軍南に征き曲蠡に次り、尚書令の荀彧使を奉じて軍を犒ふ。余と見ひ談論の末、彧言ふ、「君は左右の射を善くすと聞く、此れ実に能くし難し。」と。余言ふ、「執事［あなた］未だ夫の項発口縦、馬蹄に俯して月支を仰ぐを覩ざるなり。」と。彧喜び笑ひて曰く、「乃くなる爾［なるほど］。」と。余曰く、「埒［馬場の柵］に常経有り、的に常所有り、発する毎に輒ち中ると雖も、至妙に非ざるなり。若し平原を馳せ、豊草に赴き、狡獣を要め、軽禽を截ち、弓を使ひて虚しく弯せず［的を外さず］、中る所必ず洞なれば、斯れ則ち妙なり。」と。時に軍祭酒の張京 坐に在り、彧を顧みて手を拊ちて曰く、「善し。」と。

〈建安十年、始定冀州。穢貊獻良弓、燕岱獻名馬。時歳之暮春、勾芒司節、和風扇物、弓燥手柔、草淺獸肥。與族兄子丹獵于鄴西、終日手獲麞鹿九、雉兔三十。後軍南征次曲蠡、尚書令荀彧奉使犒軍。見余談論之末、彧言「聞君善左右射、此實難能。」余言「執事未覩夫項發口縦、俯馬蹄而仰月支也。」彧喜笑曰「乃爾。」余曰「埒有常徑、的有常所、雖毎發輒中、非至妙也。若馳平原、赴豐草、要狡獸、截輕禽、使弓不虚彎、所中必洞、斯則妙矣。」時軍祭酒張京在坐、顧彧拊手曰「善」。〉　『典論』自叙

曹操の参謀として活躍した荀彧（163-212）と交わした問答を記している。左右どちらの手でも弓を射ることができることを荀彧に褒められたところ、曹丕は「決まったコースで定まった的を外すことなく射ることができたとしても、それはまだ十分な腕前とはいえない。平原を疾走する獣や空を飛びまわる鳥、すなわ

ち動き回る対象を百発百中に射てこそ素晴らしいものであり、自分は馬に乗りながらどんな体勢でも高低自在に射ることができる」と答えた。

また、曹丕は猟を共にした相手として五官中郎将時代に「南皮の游」を共にした曹真の名をあげる。二人で麞と鹿を九頭、雉と兎を三十羽獲ったことを述べている。曹丕の射御は戦場で培ったものであり、猟の記述は自らの射御の技術の裏付けとなる。

五　猟

『典論』自叙で猟について述べているように、曹丕はよく猟に出かけ、猟を好んでいた。『三国志』文帝紀には猟の記述が本伝・裴松之註とあわせれば5例ある[22]。『三国志』のなかで猟に関する記述が最も多いのは曹丕なのである。そもそも曹丕は、延康元年（220）10月、臣下からの「勧進表」を受け、皇帝に即位するかどうかをやりとりしている最中でも、猟に出かけていた。裴松之が引用する『献帝伝』には、十月乙卯（10月13日）の上表に対して次のように答えている。

> 令して曰く、「当(まさ)に孤［私］の終(つひ)に当に承くべからざるの意を議すべし。猶ほ猟す、還(かへ)れば方に令有らんとす。」と。
>
> 〈令曰、「當議孤終不當承之意而已。猶獵、還方有令。」〉

“私が即位しないということだけを議論せよ、この件については猟に出かけてくるので、帰ってきてからまた令を下す”と言い残し、猟に出かけていってしまう。

また、曹丕には猟に対する思いがつまっているかのような「校猟賦」という作品がある。「校猟賦」は、建安 18 年（213）曹操に従って猟に出かけた際に曹操に命じられてつくった作品と言われる[23]。曹丕の他にも陳琳、王粲、応瑒、劉楨も賦を作っているが[24]、曹丕の「校猟賦」はその中でも特徴的である。王粲たちが狩猟を行う人々の雄壮さを表現したのに対し、曹丕は狩猟のことだけでなく、獲物を競うことやその後の酒宴、そして狩猟から日常へと戻っていくことまでを詠んだ。他の者が猟を外から眺めている作品であるとすれば、曹丕は狩猟を行う者の作品であると言える。

曹丕の「校猟賦」は全文は伝わらず、『全三国文』（『全上古三代秦漢三国六朝文』）は『初学記』『芸文類聚』『太平御覧』などの類書に収められている部分を流れに沿って復元している。以下、長文であるが『全三国文』が復元した「校猟賦」を掲載する[25]。

校猟賦	校猟の賦　　曹丕
高宗征于鬼方兮	高宗［殷の武丁］　鬼方を征し
黄帝有事于阪泉	黄帝 阪泉に事とする有り
慍賊備之作戻兮	賊備［劉備］の作戻に慍り
忿吳夷之不藩	呉夷［呉］の不藩に忿る
將訓兵于講武兮	将に兵に講武を訓へんとし
因大蒐乎田隙	因りて大いに田隙［農閑期］に蒐す［狩猟する］
披高門而方軌	高門を披きて方軌し［車両を並べて進み］
邁夷途而直駕	夷途［平坦な道］を邁して直駕す
長鎩糺霓	長鎩［大矛］　霓を糺はせ［武器が集まって光を放つ様］
飛旗拂天	飛旗 天を払ふ
部曲按列	部曲［軍陣］　按列し［整列し］
什伍相連	什伍［小部隊］　相連なる
跱如叢林	跱［待機］すること叢林の如く
動若崩山	動くこと崩山の若し
沌沖天之素旄兮	沖天［天を沖くほど高い］の素旄［白旗］を沌き
靡格澤之修旃	格沢［星の名］の修旃［赤旗］を靡く
雄戟趯而躍厲兮	雄戟 趯として［力強く］躍厲し
黄鉞扈而揚鮮	黄鉞 扈ひて揚鮮す［輝きをあげる］
超崇岸之曾崖	崇岸［高い岸］の曾崖を超へ
厲漳滏之雙川	漳滏の双川［漳水と滏水］を厲る
千乘亂擾	千乗［戦車の大部隊］　乱擾し
萬騎奔走	万騎［騎兵の大部隊］　奔走す
經營原隰	原隰［原野・湿原］を経営［往来］し
騰越峻岨	峻岨［いくつもの山々］を騰越す
彤弓斯彀	彤弓［朱色の弓］　斯に彀き
戈鋋具舉	戈鋋［戈と小さな矛］　具に挙ぐ
列翠星陳	列翠［戦車の羽毛飾り］　星陳し［星のように並び］
戎車方轂	戎車［戦車］　方轂［並走］す
風迴雲轉	風迴り雲転じ
埃連飈屬	埃連なり 飈 属り
雷響震天地	雷響 天地を震はせ
譟聲蕩川岳	譟声 川岳を蕩かす
遂躪封豨　藉麈鹿	遂に封豨［巨大な獣］を躪み　麈鹿［大きな鹿］を藉み
捎飛鳶　接鸑鷟	飛鳶を捎り　鸑鷟［巨大な鳥］に接す
聚者成丘陵	聚る者［獲得した禽獣］　丘陵を成し

散者闐溪谷	散る者 溪谷を闐(うづ)む
流血赫　其丹野	流血赫(あか)く　其れ野を丹(たん)にす［赤く染める］
羽毛紛　其翳日	羽毛粉れ　其れ日を翳(おほ)ふ
考功較績	考功［獲物］　績［手柄］を較(くら)べ
班賜有敘	班賜［恩賞］　敘有り
授受甘𩞁	甘𩞁(かんはう)［美味な炙り肉］を授受し
飛酌清酤	清酤(せいこ)［清酒］を飛酌す
割鮮野烹	鮮を割き 野に烹(に)
舉爵鳴鼓	爵［酒杯］を挙げ 鼓を鳴らす
鑾輿促節	鑾輿(らんよ)［君王の車駕］　節を促し［動き出す］
騁轡迴翔	轡(くつわ)を騁(は)せ 迴(めぐ)り翔(と)ぶ
望雀臺而增舉	雀台［銅雀台］を望みて増挙し［足並みを早め］
涉幽塹之花梁	幽塹［堀］の花梁［装飾された橋］を涉(わた)る
登路寢而聽政	路寢(ろしん)［宮室］に登りて政を聴き
總羣司之紀綱	群司［百官］の紀綱を総(す)ぶ
逍遥後庭	後庭に逍遥(せうえう)し
休息閒房	閑房に休息す
步輦西園	西園に歩輦(ほれん)し
閒坐玉堂	玉堂に閑坐す

最初に、高宗（殷の武丁）と黄帝の故事を用いながら、劉備や孫権と対峙しているいま、軍事訓練をおこなうことの重要さを述べる。次いで、狩りに出発する軍隊の整然とした様子や、雄々しく進軍するさまを描き、多くの戦車や騎馬が集まり、弓や矛を揃えて猟の準備を整える。そして機が熟すと、狩猟が始まる。その様子は「雷響 天地を震はせ／譟声 川岳を蕩(うご)かす」と表現される。大規模な軍隊の狩猟は、天地をふるわせ、山川を動かすほどの勢いがあり、多くの獲物たちが狩られていく。「流血赫(あか)く 其れ野を丹(たん)にす／羽毛粉れ 其れ日を翳(おほ)ふ」とは、下を見れば、獲物の血で大地が赤く染まり、上を見れば、鳥の羽が飛び散って太陽を覆うばかりであったと猟場の生々しさを描写したものである。

猟が終わると、みながそれぞれ手柄を比べながら酒宴に入る。捕った獲物をその場でさばき、酒杯をかわす。狩猟で武技を披露し、どれだけ獲物を捕ったかを競い、その獲物を肴にして語らう。狩猟の楽しみが詠みこまれていよう。

この後は脱文があるかもしれないが、曹丕の「校猟賦」はこれだけで終わらず、帰還してからのことも詠む。君王の車駕を中心に、みなが整然と鄴の銅雀台へと帰っていく。宮廷に帰り着き、その間の政治を処理すると、庭園を散歩し、部屋でくつろぎ、ゆったりとした日常にもどっていく。曹丕の描く狩猟は、政治や日

常とつながるものであった。

『典論』自叙や「校猟賦」など曹丕自身の記述からは、猟を楽しんでいたことがうかがえる。裴松之が注に引く『魏略』では、黄初 6 年（225）の詔を収め、そこでは軍を動かして呉に隙が出来れば一気に攻撃し、もし侵攻できなさそうであれば、「当に六軍を舒して以て遊猟せしめ、軍士を饗賜すべし」と述べたことが記されている[26]。呉に侵攻できなければ“全軍をくつろがせて猟を行い、軍士たちをねぎらおう”というのであり、猟という楽しみを共に分かち合おうとしている。曹丕が好んだ猟は弓・馬の腕前を披露する機会であり、武人たちとの交流の場でもあった。

六　『三国志』に見える「猟」

曹丕自身の記述からは楽しんでいたことがうかがえる「猟」であったが、陳寿の編纂した『三国志』に見える曹丕の「猟」は、皇帝の猟を諫める話題がほとんどである。

まず文帝紀には、黄初元年（220）、曹丕が皇帝即位後すぐに猟に出かけようとして戴陵に諫められたことが記されている[27]。

戴陵に対して曹丕がどのように振る舞ったかは記されていないが、臣下の列伝には皇帝曹丕の対応が記録されているものもある。鮑勛（？～ 226）の諫めは、次のように記されている。

> 文帝禅を受く［禅譲］、勛［鮑勛］は毎に陳ぶ、「今の急なる所は、唯だ軍農［軍事・農業］に在り、寛く百姓に恵す。台榭苑囿［宮殿・庭園］は、宜しく以て後と為すべし。」と。文帝将に遊猟に出でんとし、勛 車を停めて上疏して曰く、「臣聞く五帝三王、本を明らかにし教へを立て、孝を以て天下を治めざるは靡し。陛下の仁聖惻隠、古烈に同じくする有り。臣冀はくは当に前代を継踪すべく、万世をして則とすべからしめんことを。如何ぞ諒闇の中［父曹操の喪中］に在りて、馳騁［游猟］の事を修めんや。臣は死を冒して以聞す、唯だ陛下察せよ。」と。帝手づから其の表を毀りて競ひて猟に行く。中道にて頓息す、侍臣に問ひて曰く、「猟の楽しみたるは、八音［音楽］に如何ぞ。」と。侍中の劉曄対へて曰く、「猟 楽に勝れり。」と。勛は抗辞して曰く、「夫れ楽は、上は神明に通じ、下は人理に和し、治を隆くし化を致し、万邦咸乂めしむ。移風易俗、楽より善きは莫し。況んや猟は、華蓋を原野に暴し、生育の至理を傷ひ、風に櫛り雨に沐し、時隙［農閑期］を以てせざるをや。……陛下は以て務めと為すと雖ども、愚臣の願はざる所な

り。」と。因りて奏す、「劉曄は佞諛にして不忠、陛下の過戯の言に阿順［阿諛追従］す。……請ふ有司 罪を議して以て皇朝を清くせんことを。」と。帝怒りて色を作し、罷めて還り、即ち勛を出だして右中郎将と為す。

〈文帝受禪、勛每陳「今之所急、唯在軍農、寬惠百姓。臺榭苑囿、宜以爲後。」文帝將出游獵、勛停車上疏曰、「臣聞五帝三王、靡不明本立教、以孝治天下。陛下仁聖惻隱、有同古烈。臣冀當繼蹤前代、令萬世可則也。如何在諒闇之中、修馳騁之事乎。臣冒死以聞、唯陛下察焉。」帝手毀其表而競行獵。中道頓息、問侍臣曰、「獵之爲樂、何如八音也。」侍中劉曄對曰、「獵勝於樂。」勛抗辭曰、「夫樂、上通神明、下和人理、隆治致化、萬邦咸乂。移風易俗、莫善於樂。況獵、暴華蓋於原野、傷生育之至理、櫛風沐雨、不以時隙哉。……雖陛下以爲務、愚臣所不願也。」因奏「劉曄佞諛不忠、阿順陛下過戯之言。……請有司議罪以清皇朝。」帝怒作色、罷還、卽出勛爲右中郎將。〉

『三国志』巻 12・鮑勛伝

曹丕は禅譲を受け皇帝に即位したあと、父曹操の喪中でさえも猟に出かけようとしていた。それを鮑勛に諫められた。この時、曹丕は鮑勛の上奏文を破り捨て、侍臣に猟と音楽とではどちらが楽しいかを問いかけたところ、劉曄が「音楽よりも猟の方が楽しい」と答えた。鮑勛はなおも諫言を重ね、音楽こそ治政の根本であることと、猟が生態系を崩すこと、農閑期に行うべきことなどを挙げ、中止するよう願った。ところがこのやりとりの中で鮑勛は劉曄にも言及し、阿諛追従の徒として罪に問うよう要請した。「猟の方が楽しい」と答えた劉曄を批判するに至り、曹丕は怒りを露わにして猟を中止し、帰還して鮑勛を左遷した。

鮑勛の逸話は、曹丕の猟に対する思いと、皇帝即位後も頻繁に猟に出かけていたという事実を伝えるものであるが、その一方で時勢を考えずに猟に出かけ、猟を諫めた鮑勛を左遷する愚かな皇帝像を示すことにもなる。この他にも、『三国志』王朗伝には次のような諫めがある。

文帝践阼する［天子の位にのぼる］に及び、改められて司空と為り、進みて楽平郷侯に封ぜらる。時に帝頗る游猟に出でて、或いは昏夜にして宮に還る。朗［王朗］上疏して曰く、「夫れ帝王の居は、外は則ち周衛を飾り、内は則ち禁門を重んず、将に行かんとすれば則ち兵を設けて後に幄を出づ、警を称して後に塀を践む。……近日車駕出臨して虎を捕へ、日昃きて行き、昏に及びて反る、警蹕の常法に違ひ、万乗の至慎に非ざるなり。」と。帝報じて曰く、「表を覧るに、魏絳 虞箴を称して以て晋悼を諷し、相如 猛獣を陳べて以て漢武を戒むと雖ども、未だ以て喩とするに足らず。方今二寇［呉・蜀］未だ殄きず、将帥遠征せんとす、故に時に原野に入りて以て戎備を習ふ。夜

還の戒めに至りては、已(すで)に有司［官僚］に詔して施行す。」と。

〈及文帝踐阼、改為司空、進封樂平鄉侯。時帝頗出游獵、或昏夜還宮。朗上疏曰、「夫帝王之居、外則飾周衞、内則重禁門、將行則設兵而後出幄、稱警而後踐墀。……近日車駕出臨捕虎、日昃而行、及昏而反、違警蹕之常法、非萬乘之至慎也。」帝報曰、「覽表、雖魏絳稱虞箴以諷晉悼、相如陳猛獸以戒漢武、未足以喻。方今二寇未殄、將帥遠征、故時入原野以習戎備。至於夜還之戒、已詔有司施行。」〉　『三国志』巻 13・王朗伝

曹丕は頻繁に猟に出かけた。時には日が暮れてから出発し、夜が更けてから宮殿に帰ってくる事もあったという。一度や二度ではなかったのであろう。このような行為を、王朗は諫めたのである。この時の曹丕は、蜀や呉の脅威がある現在、軍事訓練として猟を行っていることを述べて、王朗の反対意見を退けている。

鮑勛の上奏は破り捨て、王朗の上奏は軍事訓練という言葉で封じている。猟が軍事訓練の一環であることは事実である。ただ、これらの諫めからは、曹丕の猟が頻繁であったことと、皇帝の行為としてはふさわしくないものとして見られていたことがうかがえる。少なくとも文人からは諫めの対象となっており、陳寿の『三国志』には皇帝である曹丕の猟が否定的な話として記録されることとなった。

七　剣

曹丕の武に関する記述は射御や猟だけではない。太子の時代に著した「剣銘」（建安24年）や「露陌刀銘」には、曹丕が宝剣・宝刀などを打たせたことや、特に短剣を好んでいたことがうかがえる。『典論』自叙では、各地の剣術を学んだことを記し、ある時には酒宴の場で剣術論が高まり、奮威将軍の鄧展とその場で手合わせに発展したこともあったという。

時に酒酣(たけなは)にして耳熱く、方(まさ)に芋蔗(かんしよ)［サトウキビ］を食す。便ち以て杖と為し、殿を下りて数交し、三たび其の臂(うで)に中(あ)つ、左右大いに笑ふ。展［鄧展］の意平らかならず、更に之を為さんことを求む。余「吾が法は急属なり、相ひ面に中(あ)て難し、故に斉しく臂うつのみ」と言ふ。展「復た一交を願ふ」と言ふ。余 其の突きて以て交中を取らんと欲するを知り、偽りて深く進むに因りて、展 果たして尋いで前(すす)み、余却つて脚鄭し、正に其の頽(ひたい)を截つ、坐中驚き視る。

〈時酒酣耳熱、方食芋蔗。便以爲杖、下殿數交、三中其臂、左右大笑。展意不平、求更爲之。余言吾法急屬、難相中面、故齊臂耳。展言願復一交。余知

其欲突以取交中也、因僞深進、展果尋前、余却脚鄭、正截其顙、坐中驚視。〉

『典論』自叙

曹丕と鄧展は、酒宴の場にあった芋蔗を武器にみたてて手合わせをした。「芋蔗」は、「諸蔗」「甘蔗」とも記し、イネ科サトウキビ属の総称である。茎を噛んで汁を飲むことができ、根元に行くほど甘みを増す。曹丕は「感物賦」の序文で、郷里譙（しょう）の自邸に「諸蔗」を植えていたことを述べている[28]。当時、芋蔗（サトウキビ）を好んでいたのであろう。その芋蔗（サトウキビ）を武器にみたて、曹丕は鄧展の腕を三回打ちつけた。さらにはもう一勝負挑もうとする鄧展に対し、「自分の剣術は顔を狙うことは難しく、腕を打つだけだ」と言った上で、わざと隙を作り、突進してきた鄧展の額を打ち据え、その場に居た人々の目を見張らせたという。これは曹丕が自身の剣術について述べた一文である。曹丕には武人としての一面も強くあり、それ故に武人たちからの支持も厚かったと推測されるのである。

曹丕が武事に自負を抱いていたという前提のもとで、『典論』に収められる「剣銘」についても確認したい。「剣銘」は、『北堂書鈔』『芸文類聚』『太平御覧』などの類書に散佚していたものを、『全三国文』が残された句から一つの文章に組み直したものである[29]。『北堂書鈔』巻 123・刀、『芸文類聚』巻 60・刀では「剣銘」の文章を引用し、「典論曰」としている。すなわち、「剣銘」は『典論』の一篇だったのであり、そのため厳可均も『全三国文』では「剣銘」を、文帝（曹丕）の『典論』の文章を全て挙げた巻8に収めている[30]。

「剣銘」は、銘文に「惟（こ）れ建安廿有四載二月甲午、魏太子丕 百辟宝剣三を造らしむ」とあり、建安24年（219）2月甲午（12日）、当時太子であった曹丕が執筆したものであり、父曹操が亡くなるおよそ一年前の作である。「剣銘」の序文では次のように述べている。

昔者（むかし）周魯の宝赤刀孟労、雍狐の戟、屈盧の矛、孤父の戈、楚越の太阿、鈍鉤、徐氏の匕首、凡そ斯れ皆上世の名器なり。君子は文事有りと雖も、必ず武備有らん。余 撃剣を好み、善く短［短剣］を以て長［長剣］に乗ず。茲（こ）の良金を選び、彼の国工に命じ、精して之を錬し、百辟に至りて、其れ始めて成るなり。

〈昔者周魯寳赤刀孟勞、雍狐之戟、屈盧之矛、孤父之戈、楚越太阿、鈍鉤、徐氏匕首、凡斯皆上世名器。君子雖有文事、必有武備矣。余好擊劍、善以短乘長。選茲良金、命彼國工、精而錬之、至于百辟、其始成也。〉

『全三国文』巻八[31]

「百辟」は何度も精錬したこと。曹丕は太子時代に、国工に命じて「飛景」「流采」「華鋒」という剣、「霊宝」「含章」「素質」という刀、「清剛」「揚文」という匕首、「龍鱗」という露陌刀を造らせている。そして「君子は文事有りと雖も、必ず武備有らん」と言う。政治を行う君子は必ず武事にも通じていなければならないと述べるのであり、曹丕自身に文事と武事に対する自負があるからこその表現であろう。

「余 撃剣を好み、善く短［短剣］を以て長［長剣］に乗ず」については、『典論』自叙に具体例となるような逸話が収められている。

> 夫(そ)れ事は、自ら己の長を謂ふべからず。余少(わか)きとき複を持することを暁(さと)り、自ら対無し［敵対するものはいない］と謂(おも)ふ。俗に名づけて双戟［両手に戟を持つこと］を坐鉄室と為し、鑲楯(じやうじゆん)［両手に楯を持つこと］を蔽木戸と為す。後に陳国の袁敏(えんびん)に従ひて学び、単を以て複を攻むること、毎(つね)に神の若(ごと)しと為す。対家［相手］出づる所を知らず、告げて曰く(32)、「若(も)し敏に狭路に逢へば、直(ただ)ちに決するのみ。」と。
>
> 〈夫事、不可自謂己長。余少曉持複、自謂無對。俗名雙戟爲坐鐵室、鑲楯為蔽木戸。後從陳國袁敏學、以單攻複、毎爲若神。對家不知所出、告曰若逢敏於狹路、直決耳。〉　『典論』自叙

曹丕は若いときは武器を両手に持っており、敵はいないと思い込んでいた。しかし袁敏に剣を学ぶと、単剣で両手に武器を持った相手に勝つことが素晴らしい事であると悟り、曹丕は武器を一つだけ持つようにしている。「撃剣」は、剣を用いて敵と相対する剣術のことであり、曹丕は特に短剣を扱うことを好み、かつ得意としていたようである。「剣銘」でも短剣で長剣に勝つことがすばらしいと述べていたように、曹丕は剣術についても“至妙”を目指していた。以上のように、曹丕の『典論』には、武事も積極的に述べられているのである。

結

陳寿が『三国志』を編纂した際、当然ながら曹丕は魏の初代皇帝として崩御していた。陳寿自身に曹家に対する批判的な見解があったかもしれないが、おそらく当時の人びとにとっても皇帝が軽々しく猟に出かけることをよく思わない者は少なくなかったのであろう。『三国志』が主として収めるのは、皇帝曹丕の猟に対する諫めであり、曹丕の猟は否定的な記録であった。『三国志』の記述だけを見た場合、曹丕の猟は警備の都合を考えない迷惑な行為であり、武事に積極的と

いうのも皇帝のイメージにはふさわしくないものであった。しかし、『典論』に収める文章の中には、猟や弓・馬・剣など武のことを自覚的に語っており、曹丕には武人としての矜持を抱いていたことがうかがえる。

曹丕の『典論』に収められている文章は一時期に書かれたものではなく、太子に立てられた頃から皇帝即位後までである程度の年代に亘って執筆されたものである。異なる事情・状況においてそれぞれ書かれた文章を統一的に理解しようということには無理があるかもしれないが、『典論』としてまとめられたことにある程度の方向性はうかがえる。渡邉義浩氏を筆頭に、宋戦利氏・和久希氏が指摘する『典論』は政治的な意図を持つものという観点に賛同する。『典論』の中に君主権力の確立のために書かれていると思う文章は多い。ただしそれは「文」に関することだけでないということである。『典論』はどうしても論文篇の印象が強く、また『三国志』の記述も皇帝のイメージに合わせるためか、皇帝個人の武術については言及されないが、曹丕は意識的に武事を語っていた。「剣銘」に見える「君子は文事有りと雖も、必ず武備有らん」という一句は、朝廷と戦場に身を置いた曹丕の見解を端的に表しているかのようである。

断片的な記録しか確認することはできないが、実際、曹丕の周辺には文人だけでなく、武人も多くいた。曹真・曹休はその代表であるが、曹丕の支持層に武人が多いことは「魏公卿上尊号奏」にもうかがえる。渡邉義浩氏の論考(33)に依拠するものであるが、「魏公卿上尊号奏」は河南省許昌市に石碑が現存する。曹丕に皇帝即位を要請する 46 人の名前が見られ、そこには賈詡・曹仁・曹洪・曹真・曹休・張郃・徐晃・張遼・許褚など、30 名以上が軍部出身者で占められている。曹操が魏公に就任することを勧めた「魏公勧進奏」と比較した場合、圧倒的に曹丕の方が武人たちからの支持が多い(34)。これも単なる偶然ではなく、『典論』などの著述や交流など、曹丕の自覚的な言行によるものであろう。正史となる陳寿の『三国志』には曹丕の武人としての側面はあまりとりあげられなかったが、曹丕自身は武人としての矜持を抱いていたと言えるのである。

注

（１）魯迅（竹内好訳）「魏晋の気風および文章と薬および酒の関係」（竹内好編訳『魯迅評論集』岩波書店、1981 年）に「後世では一般の人は彼の見解には大へん反対しています。彼は詩賦には必ずしも教訓を含まないでもいいといって、詩賦に教訓を含めようとする当時の見解に反対したのであります。近代的な文学観からみるならば、曹丕の時代は「文学の自覚時代」であったといえます、あるいは近代でいう芸術のための芸術（Art for Art's sake）のような一派であったのです」とある。

（２）童瑜「20 世紀后二十年曹丕研究綜述」（『哈爾浜学院学報』26、2005 年）参照。

（3）鈴木虎雄『支那詩論史』（弘文堂書房、1925 年）、青木正児『支那文学思想史』（岩波書店、1943 年）。

（4）岡村繁「曹丕の『典論論文』について」（『支那学研究』24・25、1960 年）。

（5）宋戦利「魏文帝曹丕対儒家文化的復興」（『文化学刊』5、2009 年）。

（6）福井佳夫『六朝文評価の研究』汲古書院、2017 年参照。

（7）渡邉義浩『「古典中国」における文学と儒教』汲古書院、2015 年、114 頁参照。渡邉氏には他に『三国政権の構造と「名士」』（汲古書院、2004 年）、『後漢における「儒教国家」の成立』（汲古書院、2009 年）などの一連の論考がある。

（8）和久希「経国の大業――曹丕文章経国論考――」（『六朝言語思想史研究』汲古書院、2017 年）。

（9）牧角悦子『経国と文章―漢魏六朝文学論―』第五章「経国と文章――建安における文学の自覚――」汲古書院、2018 年。

（10）田中靖彦「陳寿の尊晋と『三国志』」（『中国知識人の三国志像』研文出版、2015 年）参照。田中氏は、従来の研究を整理しながら、陳寿の作為を描き出す。

なお、曹丕の即位のやりとりについては、陳寿の文帝紀は簡単な記述になっているが、裴松之が『献帝伝』を註に収めたことにより、詳しい経緯が後世に伝えられた。

（11）『三国志』巻 3・明帝紀に、「戊子、詔太傅三公、以文帝典論刻石、立于廟門之外。」とある。「戊子」は「太和四年春二月十日」のこと。

（12）『隋書』巻 34・経籍志には「典論五巻、魏文帝撰」とあり、『六臣注文選』巻五には『典論』論文篇の題下注に、唐の呂向が「文帝典論二十篇」と記す。

（13）『全三国文』（『全上古三代秦漢三国六朝文』）に 26 篇、『魏晋全書』に 13 篇と佚文が 33 篇、『曹丕集校注』（河北教育出版社）に 11 篇と佚文が 24 篇ある。

（14）『三国志』巻 2・文帝紀に引く裴松之注に、「魏書曰、帝初在東宮、疫癘大起、時人彫傷。帝深感歎、……故論撰所著典論、詩賦、蓋百餘篇、集諸儒于肅正門内、講論大義、侃侃無倦。」とある。

（15）張振龍「曹丕《典論・論文》創作年代与創作目的」『信陽師範学院学報』22（2002 年）。

（16）『三国志』巻 2・文帝紀の黄初 3 年に、「冬十月甲子、表首陽山東為壽陵、作終制曰」とある。

（17）引用資料中の［　］は、筆者の補注である。以下、同じ。

（18）たとえば、魏宏爛校注『曹丕集校注』（安徽大学出版社、2009 年）でまとめた曹丕の「年譜」では、建安 16 年（211）のところに、「曹丕、曹植兄弟与王粲、徐幹、陳琳、阮瑀、應瑒、劉楨等友善往来、唱和詩賦」と、文人たちとの関わりのみを載せている。

（19）「馳騖」という表現について、夏伝才・唐紹忠校注『曹丕集校注』（河北教育出版社、2013 年）では「遊猟」のことと注を付す。『文選』に収める「与呉質書」では「馳騖」は「馳騁」に作る。曹丕は他の文章において、猟のことを「馳騁」（『三国志』巻 12・鮑勛伝）、「馳射」（『典論』自叙）と表現しており、ここの「馳騖」も猟のことと解釈される。

（20）延康元年の年は二回改元されている。建安 25 年（220）1 月 23 日に曹操が亡くなり、曹丕が魏王に即位すると建安 25 年を延康元年と改元した。『三国志』文帝紀では、2 月を延康元年としている。さらに、曹丕が皇帝に即位すると、11 月 1 日から黄初元年と改元した。本稿では、引用文でない限りは、1 月を建安 25 年、2 月から 10 月を延康元年、11 月以降を黄初元年と呼称した。

（21）帝自らの「臨送」としては、他に曹叡（明帝）が曹真を見送ったことが「真當發西討、帝親臨送」（『三国志』巻 9・曹真伝）と見える。

（22）延康元年　令曰、「當議孤終不當承之意而已。猶獵、還方有令。」（裴松之註）
黄初元年　是歳、長水校尉戴陵諫不宜數行弋獵。（本紀）
黄初二年　甲戌、校獵至原陵、遣使者以太牢祠漢世祖。（本紀）
黄初四年　辛未、校獵于滎陽、遂東巡。（本紀）
黄初六年　……若或未可、則當舒六軍以遊獵、饗賜軍士。（裴松之註）

（23）宋・章樵『古文苑』巻七・王粲「羽猟賦」の題下注に、「摯虞文章流別論云、建安中、魏文帝從武帝出獵、賦。命陳琳、王粲、應瑒、劉楨並作。琳為武獵、粲為羽獵、瑒為西征、楨為大閱。」とある。

（24）王粲「羽猟賦」、應瑒「西狩賦」は、『建安七子集』（中華書局、2005 年、105 頁／ 178 頁）に収められている。

（25）厳可均校輯『全上古三代秦漢三国六朝文』中文出版社、1975 年、第 2 冊 1074 頁を底本とし、『曹丕集校注』（安徽大学出版社）と『曹丕集校注』（河北教育出版社）を参考にした。「高宗征～乎田隙」は『初学記』巻 22・兵部、「登路寢～坐玉堂」は同巻 24・居処部、「披高門而方軌　邁夷途而直駕」「扽沖天～而揚鮮」「列翠星～之花梁」は『太平御覧』巻 339・兵部、「長鎩糾～若崩山」「超崇岸之層崖　厲漳滏之雙川」「千乗亂～鋋具舉」は『芸文類聚』巻 66 に収められている。

ただし、底本は「扽沖天」を「抗沖天」に、「騰越峻岨」を「騰越峻阻」に作るが、『太平御覧』巻 339 に引く「魏文帝校猟賦」に従って改めた。また底本は「其翳日」を「其翳目」に、「考功較績」を「考功効績」に作るが、『芸文類聚』巻 66 に引く「魏文帝校猟賦」に従って改めた。

（26）『三国志』巻 2・文帝紀に引く裴松之注に、「魏略載詔曰、……吾欲去江數里、築宮室、往來其中、見賊可擊之形、便出奇兵擊之。若或未可、則當舒六軍以遊獵、饗賜軍士。」とある。

（27）『三国志』巻 2・文帝紀に「是歳、長水校尉戴陵諫不宜數行弋獵。」とある。この一文は、皇帝即位後に収められており、おそらく皇帝即位後の黄初元年（220）11 月か 12 月のことであろう。

（28）『芸文類聚』巻 34 に、「感物賦曰、喪亂以來、天下城郭丘墟、惟從太僕君宅尚在。南征荊州、還過鄉里、舍焉。乃種諸蔗于中庭。」とある。

（29）厳可均校輯『全上古三代秦漢三国六朝文』中文出版社、1975 年、第 2 冊 1097 頁参照。

（30）韓格平主編『魏晋全書』（吉林文史出版社、2008 年、第 1 冊 109 頁）も「剣銘」は、『典論』の一篇としている。

（31）「剣銘」の底本には『全三国文』を用いたが、句読点・解釈においては『魏晋全書』『曹丕集校注』を参考にした。

（32）「告曰」は字句に異同があり、「先日」「先曰」に作るものもある。

（33）渡邉義浩「「魏公卿上尊号奏」にみる漢魏革命の正統性」『大東文化大学漢学会誌』43 号、2004 年参照。

（34）渡邉前掲論文参照。ただし、渡邉氏は軍部が突出して曹丕を支持することを指摘をしているが、それは曹操に注目し、曹操の支持層に「名士」の比重が高いことを重視したものである。曹丕の即位については、「軍部を中心とした幅広い層の支持を得ていることを誇示」したものと指摘するが、むしろ曹丕自身に武人としての自覚があり、軍部の支持を受ける基盤があったのではないかということが本稿の観点である。

（ながた　あきの・修士課程修了）
（まつの　としゆき・教授）